

ビククリして「何に使うのですか」と聞くと「敵が進駐して来た時、どんな事が起こるか分からないし、万一にも婦女子が辱めを受けるようなことがあってはならないので、護身用に所持させ飲んでもらうんだよ」と。私は「それでは自殺じゃないですか」と言えば「生きて恥をさらすよりましだよ」との事であり、兵隊の自決と同じである。「福岡中尉殿、充分注意して取り扱って下さい」と言って留守隊に帰隊した。

福岡中尉の言葉や師団司令部の模様で敗戦であるという真実性を知ることができた。早速に、機密漏洩維持のためと、復員に支障があったとは思ひ、丸秘重要書類その他を焼却するのに二日もかかってしまった。

〔編注〕

竹内章氏の手記（その一）は、第Ⅷ巻に掲載されております。

第十三師団

山砲第十九連隊

―戦友を背にして―

宮城県 加藤 侃 一

私は大正十（一九二二）年二月二十八日生まれで、昭和十六（一九四一）年徴集の現役兵であります。新潟県高田市にある独立山砲兵第一連隊（東部第二十八部隊・現陸上自衛隊高田駐屯地）に昭和十六年十二月十五日に入隊し、三カ月間本科の教育を受け、一期検閲後、本科より隊付衛生兵に転じ、仙台陸軍病院において五カ月間の衛生兵教育を受けました。

中支派遣軍第十三師団（鏡部隊）山砲兵第十九連隊に転属のため、昭和十七年七月下旬に仙台出発、同年八月上旬に上海郊外の呉淞に上陸、ここは草原地帯でアンペラの仮宿舎でした。二日程滞在休養し、以後本隊に追及し山砲兵第六中隊付衛生兵として配属になり

ました。

第十三師団は上海事変当時、昭和十二年に編成された師団であります。私の配属になった第六中隊の歴代の中隊長は陸軍士官学校出身者であり、日常の教育、訓練はもちろん軍律の厳しさは想像に絶するが如しで、士官学校と同じ教育でありました。従って山砲兵連隊の基幹中隊でもあり、「鬼も住まない六中隊」とまで連隊内では言われておりました。

私が昭和十七年から同二十一年まで足掛け五年間に、討伐をはじめ大小の諸々作戦に参加したのは七回に及びました。皆様のお陰で九死に一生を得て帰還する事ができ、身をもって戦争体験の足跡を「戦友を背にして」と題して私なりに二百七ページに及ぶ自分史を書き綴ることができました。

これまでに戦争を知らない子供達、孫達に戦争とは、どんなものなのか、戦場とはどんな所なのか、どのような命令のもとに、何を思い、何を考え、祖国日本と家族の為に戦ったかを一冊に纏め、表現いたしま

した。いつしか誰かが、当時の戦争の足跡に関心を抱き、時代の何かの参考になることもあるだろうと思っております。五年間の戦争体験を申し上げますと長話になると思いますので、湘桂作戦に参画した戦場の生のままの姿を書き述べます。

中支を中心とした最大作戦、所謂「湘桂作戦」が発起されました。我が山砲兵は長期間、警備地であった湖北省荆門県郢家集を後に、新月の光照る中、昭和十九年四月二十日に出陣、第十三師団の集結地は江西省崇陽でありました。まだ辺りは薄暗く、夜も明けぬ五月二十七日未明、伝令が小雨をついて飛んできました。不寝番が「起床！ 起床！」と、がなりたてるので、その大声に皆飛び起きました。

小雨が軍衣に降りかかってくるではありませんか、中隊は今までの静寂から行動に早変わり、慌ただしい動きと変わりました。幾度の作戦を積んできた古兵達の諸動作は素早く、たちまち準備完了。整列が終わるや小埜中隊長の「着け剣！」の号令がまだ明けやらぬ空気を破って流れて行くのでした。「捧げ銃！」と一

段と高い号令が発せられました。遙かに東の空に向かつて銃を高く挙げ、祖国の弥栄を願って微動だにしない、熱い血潮が体内を駆け巡る感動であり、死を覚悟した一瞬でもありません。

この時の我が中隊の総員はおよそ二百五十人、駄馬約百頭、七五ミリ九四式山砲三門の編成でありました。小笠中隊長の「前へ！ 進め」の号令は今までにない程、凛々しく感じられました。いよいよこれから死地に足を踏み入れていたのであります。この発進が大東亜戦争最大の作戦である、湘桂作戦の発起を告げる第一歩でもありました。

もちろん、我が第十三師団将兵は、全軍の先陣をきって発進して行きました。ちょうどこの頃は梅雨期にさしかかり、来る日も来る日も雨との戦いで、泥濘に足をとられながら、敵中国軍きつての最強部隊といわれる第五十八軍の布陣に奇襲攻撃をかける為、江西、湖南の省境を走る一八〇〇メートルの高峰萬洋山系を万難を排しても踏破しなければならなかったのです。いよいよ踏破にかかり前進はしていますが、前が

つかえて進んでは止まり、止まっては進むの繰り返しで疲労度は高くなるばかりでした。

前進して行くと小道は、突如獣道となって駄馬は到底通ることはできません。工兵隊が岩山を爆破し小道を作り、漸く何とか通る事ができ、それも馬から駄載物を卸して馬だけ通る小路であり、駄載物は砲手が手分けし臂力搬送するのです。三昼夜もかかって漸く頂上に達したと思うと、今度は下山しなければならぬのです。それも二〇キロ以上も下ることになります。馬にとつては下り坂は、登り坂よりも大変なことです。足を突っ張って動こうともしない。また馬から駄載物を降ろし、臂力搬送に取りかかるのです。砲手数人で馬を支えながら誘導するのです。

六月五日から再び雨となり、それが七日の朝には物凄い豪雨となり、何とか雨を凌ぐようと辺りを見ても雨を凌ぐ場所はどこにも見当らない。人馬共にずぶ濡れ、小路は山と路との区別が全く分からない状態でした。泥濘に足をとられ前進は益々困難をきたすのでし

た。足を滑らせたなら人馬諸共に千仞の谷底に転落の運命が待ち受けていました。

漸く大きな山越えをしたと思うと前面には嶺また嶺が続いているのです。また、あの山を越えて行くのかと思っただけでも気が遠くなりそうでした。疲労している初年兵達に分隊長から気合のかかる声が聞こえてきます。全員まるで泥人形のようになって一八〇〇メートルの高峰萬洋山系を無事踏破できたのは、十日夕刻であったと思います。漸く小川の畔で野営する事になり、大雨でずぶ濡れになった服装の濡れを乾かすのは皆大仕事のように思いました。雨が巻脚絆の中を通り軍靴に入り、軍靴の中はゴシャゴシャになって足は水に漬かって真っ白になっていました。

また、行軍に慣れない者は特に靴傷になりがちであり、靴傷患者の多発がみられたので、この患者達を一カ所に集め、早速軍靴を脱がせ、風通しするように指導し、更に一人一人の靴傷状況を観察し手当、治療を施す。二、三日で癒える者もあり、中には一週間位癒える者もいました。行軍に慣れない初年兵等は疲労困憊、

飯に箸を付けようとしぬい者も見られるのでした。私が見回していると、分隊長古兵が初年兵達の行動を察知し「無理をしても口に入れる」「クタバ」と喚起しているが、初年兵達はただ一言「ハイ」と返事をするだけでした。

中隊はここで休養をとることなく進軍が続行されるのでした。目標の敵第五十八軍の行動は依然としてつかめない。更に進軍すると遠くの方で交戦している銃声が聞こえます。そこから一キロ程進軍すると、幅三、四〇〇メートル位ある川に突き当たりました。歩兵隊の尖兵は交戦中であり、見ると川の対岸には幾つものトーチカが並列しているのが見えます。そのトーチカの銃眼からチェッコ機銃の猛射で渡河突進が困難な状況でありました。

歩兵第六十五連隊第二大隊では、突撃隊を編成し渡河突撃の準備が見られました。我が中隊は早速高台に砲列を布置し、渡河突進の援護射撃をする。渡河突進中に歩兵の将兵は次々と川の中に倒れる姿が見えま

す。このような戦況の中で我が中隊の砲一門の一弾が見事敵のトーチカの銃眼に命中、更に二弾目は別のトーチカにも命中粉碎、敵も山砲の威力に恐れをなしか射撃を中断したのでした。これに乗じて第二次、第三次の勇猛果敢な突撃隊によって敵陣地も遂に占領され、川の対岸から日の丸の旗が高々と見え、遠くから万歳の歓声が聞こえてくるのでした。私はこの凱歌の声は感無量と言わざるを得ませんでした。

その後、我々は敵を求めてひたすら進軍するのでした。重装備で連日連夜四、五〇キロの強行軍で、行軍に慣れない者にとっては大変な苦勞の毎日であったと思います。戦いはなになんでも歩かなければならないのです。歩くことは総ての戦力に大きな原動力となつて現れることでないでしょうか。第三次長沙作戦、萍郷、瀏陽、醴陵、来陽等の攻略戦は省略し、衡陽城攻略戦の一部だけを申し上げます。

衡陽城には中国軍きつての猛将軍と言われる「方先覺」が率いる十余万の大軍が防備おさおさ怠りなしの

体制で布陣していたのでした。衡陽城の傍らを川幅五、六〇〇メートル位あると思われる湘江が勢い良く流れていて、その対岸に布陣している敵に我が軍の野山砲二個連隊、その他重火機が連日砲撃を加えるが、びくともせず余り成果が得られなかったのです。

敵は我が軍の砲撃個所を見定め山砲、迫撃砲等で反撃してくるのでした。なぜ衡陽城を是が非でも攻略しなければならぬかというのは、日本から朝鮮を経由し中支（中国）を縦断してビルマルートを完成し南方からの諸々の資源を確保しよう、との説もあつたやに風聞されていきました。その為には衡陽を通らなければならぬので衡陽を攻略しなければならぬかつたというのです。従つて反面、敵は衡陽城を攻略されると重慶、昆明に通じる公路を許すことになるので衡陽城は何としても死守しなければならぬかつたのです。従つて敵と味方の双方がどこまで食い付いて行くかが、この戦いの天王山とまで言われていたのです。

連日四十度を超す猛暑、それに加えて無風状態、湖南の暑さは炎天地獄の如く「電線に止まつた雀が余り

の暑さで焼け落ち、それを飢えた猫が食うとその猫が火傷する」と言われる程の猛暑です。このことは大陸の夏を経験した人でなければ想像がつかないことだろうと思います。

猛暑の中での衡陽城は敵の頑強な抵抗と闘いながら、我が軍は疾風電撃の如き激戦が幾度となく繰り返されましたが、難攻不落の戦況でありました。そこで我が軍は、いつまでも繰り返しの戦闘では一線將兵に損傷を与えるばかりであるとの判断のもとに、陸軍連合による攻撃戦に変えました。敵衡陽城の要塞をくまなく雨霰の如く砲弾を打ち込み、呼応して爆撃機による爆弾投下、歩兵隊による肉薄攻撃等の総攻撃の決行によって、敵も衡陽城をこれ以上死守すること能わずと観念したかのように、敵の白旗が一本、二本と増え始めたのが見えるのでした。

我が軍は砲撃の「射方止め！」の号令が発せられ、衡陽城の攻略戦が終止符を打ち、難攻不落といわれた衡陽城も遂に陥落したのです。激戦下での両軍の損傷

は計り知れないものがあったと思います。

連日の猛暑によって高温多湿それに無風状態のため、体内の水分が全部汗となって発散してしまふ。作戦行動に慣れない初年兵が行軍中に日射病でバタバタ倒れる。戦争病といわれる下痢患者が多発する。これは体内の塩分が減少するからであって、日射病の二因につながるものです。中隊の衛生兵は私と初年兵の二人で有りますが、患者の多発する時には、手当、処置には大変な苦勞でした。零陵、祁陽、全県、桂林、柳州等の攻略戦については省略します。

我が中隊は進撃を続け、茅野市という民家に宿営し、翌日歩兵第四百連隊第二大隊に配属になり、桂林東方二十五キロ地点に達した所で、有力な敵発見との情報を受け直ちに進路を変更、山路の暗闇の中、進撃に移りました。明け方、眼下に広がる光景に「アッ！」と驚嘆の声をあげそうになりました。そこには我々が予想もしない別世界が展開しているではありませんか、タケノコのような屹立した岩山があるかと思うと、巨大な頭のような岩山が聳え立っているの

でした。その岩山の先に平地が遠く見えます。この中を一条の川が南北に蛇行して走っていました。今までは異なった山々の姿を映し出しているのです。この風景は日本では見ることのできない絶景であり、風光明媚そのものの如しでした。誰もが唯々感嘆の一言につきるのでした。この先は敵飛行場のある桂林であります。

さて、星霜五十有余年過ぎた今でも忘れる事のない時恰も十一月二日は、珍しく朝から快晴となり、南支のこの辺りは十一月とはいえ日中の気温はまだ三〇度を越す高温であり、昼近くともなれば歩く足が前に出ないでアゴと汗だけが先に出る格好で誰の顔も汗と埃で真っ黒です。この姿をカメラに収めようと一人の従軍記者が盛んにシャッターを切っていました。後で記者の腕章を見て東京日日新聞社と分かりました。我々も姿勢を正し手を振って通り過ぎました。

ここは古桂荘という地名で、地形はちよつとした丘陵が走る盆地でした。「大休止」の「遁伝」である。我々が進撃してきた路の傍らにちょうど松林があり、

この松林に入つての大休止でした。松林の面積は約一町歩位と思ひました。中には雑木がほとんどなく、百坪程のクリークがあり、馬の水飼場所もあり駄馬部隊には好適な場所でした。馬より駄載物を卸し鞍を卸し、手の空いている砲手は銅付、水飼の準備をする。馭者は馬の手入れ、また馬の背に鞍傷がでていないか確認し銅付をする。終つて砲手、馭者共に昼食をとる。

私達衛生兵は背囊を下ろし、早速包帯囊を肩に患者が発生していかどうか各分隊を回り確認する。患者が一人も発生していなかった。別条がなかったので中隊長に異常なしと報告する。

衛生兵の私達は昼夜を問わず毎回の大小休止の時には各分隊を見回り患者が発生していれば、手当、治療を施し、その旨を詳細に、また異常の有無を隊長に報告する。(行軍時の隊列は先頭から後尾まで約二〇〇メートル) 今日も中隊長に報告が終わつてそれからやつと私の昼食の番です。飯蓋の蓋をとっておかず入れを覗くと何と驚くなかれ、塩一かたまりと、粉味噌

一包みでした。空腹時にはおかずが何であろうと結構うまく食べられるものでした。これが第一線のおかず、第一線の戦場では食事が何であろうと文句は言っていないのです。

昼食をとりながら中隊長と雑談をしていると、尖兵の歩兵隊との連絡係将校の小野寺少尉が中隊長への報告によると「前方五、六キロの山岳地帯で海福部隊（歩兵第百四連隊）の尖兵中隊が敵と交戦中であり、その上空を敵戦闘機数機が銃撃をしている」とのことでした。

我々中隊が大休止している前の路を歩兵一個中隊程が尖兵援護のためと思われましたが、速足で行くのが見られました。私はこれを見て「これはまずいなあ」と思いました。間もなく敵の戦闘機に発見され、一機が襲撃してきました。路を歩いてきた歩兵中隊は四方に散り、その一部が我が中隊の大休止をしている松林目掛けて飛び込んで来たのです。

それを敵機が発見、たちまち我々のいる松林周辺に落下傘爆弾をいたる所に投下し、爆弾投下が止んだと

思ったら、今度は低空飛行で松林一帯を機銃掃射です。どこにも隠蔽する所は全くなく、松の木の幹に頭を隠すだけが精いっぱいでした。直径一五―二〇センチ程の松の木はバリバリと音をたてて倒れていくのでした。松の木に繋いでいる駄馬は爆弾投下や銃撃に驚き手綱を振り切って逃走し始め、遂に我々がいることが発覚してしまったのです。

たちまちにして我々のいる松林は、爆弾投下による爆風と機銃掃射の砂塵がモウモウと舞い上がり、大激戦地の状況となりました。次々と襲撃してくる敵戦闘機は八機で、その中には操縦士の姿が見える低空飛行での機銃掃射でした。

新潟出身で私と同年兵の星喜代吉上等兵は、私の傍らで土饅頭（墓地）を台に押収したチェッコ軽機で銃身が焼けんばかりに敵機目掛けて勇猛果敢に応戦していました。この時、後方から襲来してきた敵機の機銃掃射の一弾が星上等兵の左大腿部を貫通、その貫通部位の肉は、ほとんどもぎ取られ、出血多量で負傷部位

の処置はできる状態ではなかったのです。瀕死の状態であり、星上等兵の周辺は出血で真っ赤になっていました。私は星上等兵を抱きかかえ、「星しっかりしろ、頑張れよ」と勇気付ける以外はなかったのです。星は私に抱かれ悲痛な力のない声で「天皇陛下万歳！」としっかりした口唱で二回絶叫し、三回目の「天皇陛下万歳！」はかすかな声と共に壮烈な戦死を遂げられたのでした。

第二小隊長の田村見習士官は、右足擦過銃創を受けていて、早速長靴を脱がせ、手当、応急処置し、終わるや負傷していることにも拘わらず勇猛果敢に足を引き摺りながら部下の掌握に奔走している姿が見られます。敵機は更に縦横無尽に機銃掃射し、爆弾の投下が激しさを増すばかりでした。その破片が小野寺少尉の当番兵伊藤義夫上等兵（宮城・中田）の心臓部を貫通、壮烈な戦死を遂げられました。伊藤上等兵を早速観察したところ口から少々の血が流れており、後ろの背中を診ると弾の抜け後が二寸四方に裂かれています。山田上等兵（福島）は機銃弾が頭部に命中し壮烈

な戦死を遂げられておりました。頭蓋骨の半分はどこに吹き飛んだのか探しても探してもとうとう見つけないことができませんでした。

「衛生兵！ 衛生兵！」と絶叫の声が伝わってきましたが、なかなか手が回らない状態でした。包帯嚢を小脇に抱えて駆け回り、「衛生兵！」と絶叫する方向に走って行くと、初年兵の中沢一等兵が仰向けになって寝ている。どこをやられたと聞くと両足が爆弾でやられましたと言っている。早速軍靴を脱がせて診ると爆弾の破片が軍靴を通して両足を貫通している。出血もたいしたことのない「痛むか」と聞くと「大したことはないです」と言っていました。早速負傷部位の手当、応急処置をし、分隊長に「付添いを付けて下さい」と指示して来たら、三〇メートル程離れた所に初年兵の佐藤一等兵が横向きになって寝ているのです。「どこやられた」と聞くと「右の腕を爆弾でやられました」と言っています。右腕を三角巾でしばっているのので「痛むか」と聞くと「大したことはありません」と言っています。三角巾を取って診ると余り出血

もない。早速軍服の右袖と襦袢の右袖を鉄で切り取り、負傷部位の手当、応急処置を施す（爆弾の飛弾によるものと思われた）。分隊長に「付添いをつけるように」と指示し、これで負傷者の手当は終わりかなと思っているところに一兵士が「今、暴走馬を探しに回って行くと、松林の端の方で福島軍曹が負傷して倒れています」との連絡。それで飛んで行って見ると腹ばいになっている。「どうしたのですか」と声をかけると「爆弾にやられた」という、意識もしっかりしている。

早速軍服を鉄で切り取らせて診ると背部と左腕に数個弾の入った所が診られましたので、手当、応急処置をなしたので中隊機関まで護送するように指示し、後はいないだろうかと松林一帯を確認しましたところ、負傷者がいない状況でした。戦死者三人、負傷者四人、その他疾病患者三人の一人一人の負傷の症状を逐一中隊長に報告し、なお独歩、護送、担送患者の振り分け等について詳細な打合せを行いました。

一方では負傷馬の手当をする者、暴走馬の掌握に当たる者、まるで蜂の巣をつついた如く、まさに戦々恐々としている状況を物語っているのです。暴走馬の中には遠く離れた民家まで暴走した馬もいて、探し出して連れてきたことも聞きました。いつの間にか敵機も去り、ホッとしましたが、また襲って来るのではなからうかという恐怖心がまだ頭から去らないのです。

大休止をした松林、古桂荘で空襲を受けた第六中隊は将兵、軍馬共に中隊はじまって以来、嘗てない甚大な損害を蒙り、その現状は実に悲惨極まるものでした。今回の空襲は敵ながらに爆弾の投下、機銃掃射等の威力には中隊の将兵は驚異と畏怖を身をもって体験したことと思います。

この空襲下で感心させられたのは、一人の従軍記者が危険を冒しながら写真機のシャッターを切っていた姿が見られましたが、この記者魂には改めて敬服いたしました。

先を急ぐ我が中隊は、この松林の中にいつまでも停

まることはできないのです。戦死者三人、負傷者四人、その他病弱兵数人の処置、戦死馬五頭、負傷馬三頭の処置等については小野寺少尉以下二十数人に托し、中隊の本隊は尖兵の歩兵隊に追及したのであります。

この空襲で負傷入院中の田村見習士官は破傷風を併発、中沢一等兵は両足貫通、破傷風を併発両足切断、佐藤一等兵は右腕貫通、マラリア併発し三人は遂に入院中戦傷死されたのであります。このことは後日入院先より連絡で判明いたしましたのであります。福島軍曹は四カ月の入院加療後、中隊に復帰いたしました。体内には爆弾破片の残弾があるままの退院でした。古桂荘の空襲で戦死者、戦傷者、軍馬等数多くの犠牲ができたことは中隊にとっては戦力に大なる影響を及ぼしたのであります。

処理に当たった小野寺少尉以下二十数人は四、五日後無事中隊に追及したのでした。小野寺少尉の話によると、「数多くの戦傷馬の中で最も悲しみ哀れであったのは中隊一の前脚馬『繁栄号』が鞍部貫通を受け出血

多量で余命幾らもないので止むを得ず裸馬にして残したが、暗くなっても重い足取りでどこまでもどこまでも我々についてくる」。繁栄号と生死を共にした馭者の樽川上等兵を、ふと見ると号泣している。「これは人間の今生の別れと同じことではないかと思った」と言っていました。

我が軍は破竹の勢いに乗じて次々と敵の要塞を撃破し、柳州、柳城、宜山、南丹と重慶、昆明に通じる幅員五、六メートルもある軍公路を急進撃に移りました。軍公路の両側には敵が退却時放置していった重火機が破壊され無残な形跡のまま散乱しており、敵の死屍累々たる現状、その死臭には全く目も当てられない惨状でありました。更に、避難民の一人団は逃げ場を失ったのか数え切れない程ウヨウヨしている現状でありました。こうした惨状こそはまさに戦争の現実の姿そのものであると思われました。戦場でなければ他に見ることができない、戦場の痛烈な惨状でなかるうかと実感いたしました。この惨状を日の辺りに、我々は独山を目指して進撃を続行してゆくのでした。

敵の重要拠点とされる宜山、南丹、独山と要塞に接近して行くにつれ軍公路には幅四、五メートル位、深さ三、四メートル位ある戦車壕が要所要所に掘削されていて我が軍の進撃を阻害し、抗禦に備えての攻築と思われました。こうした要塞を次々と突破し追撃の連日でした。小雪が降りかかってくる。十二月というのに第一線の我々の服装は上から下までまだ夏物でありました。これは想像つかないでしょう。中には寒さ凌ぎに土民の綿着をかぶっているのも見えました。我々の吐く息は白く見えます。多分気温は零下であつたらうと思います。この時は特に寒さを感じ、三センチ程の白銀を踏みしめながら目的地とされる貴州省の独山に入城したのは、小雪降る十二月三日の夜半でありました。

独山はビルマルートを完成させる大陸縦断道の拠点ともいわれておりました。独山から貴州省の貴陽までは約二〇〇キロの行程であり、後一週間も行軍すれば貴陽攻略も夢ではなかつたと思ひました。

約百体の戦友の遺骨は戦友の胸にしつかりと抱かれ

て、私達は独山の入城をしました。我が第六中隊がこの作戦に出陣した時の戦力は、兵員およそ二百五十人、軍馬約一〇〇頭、七五ミリ九四式山砲三門の編成でありましたが、独山に入城した時は出陣した時の半数にも満たない九十数人の兵員であり、軍馬も半数を下まわる四〇数頭に減少していたのでした。大砲も三門から二門編成となり中隊の戦力は予想以上に低下の一途を辿っていたのでした。戦力の低下は第十三師団全部隊も同じことがいえると思ひます。(第十三師団(鏡部隊)の戦力等につきましては防衛庁戦史室の記録、別紙参考があります)

出陣以来、悪戦苦闘、生死苦業を共にし、勇猛果敢に戦ってきた今は亡き戦友と、元気な晴姿で共に独山入城を夢に思っておりましたが、その姿が見えないのが私には大変残念に堪えません。

最後に、この湘桂作戦の参加者の一人として作戦等を通じて実感いたしましたことを述べて見ます。

中国の上陸地点の上海から独山までの片道、およそ

四千キロを越す長い道程であり、泥濘に足を取られながら雨と戦い、食料に悩まされ、また猛暑と戦いながら、この二本の足でよくも歩き通したと自分ながらに驚きました。ただただ感慨無量と言わざるを得ない心境でありました。

日常の体力の錬磨、強固な精神力の発揚、所謂どんな苦境にも耐え忍ぶ根性が物語っていることではなからうかと実感いたしました。戦争とは経験とチームワークがあつてこそ、その都度敵に対応できるのであり、そのチームワークは長い伝統によって作り上げられることではないかと思ひます。また軍人の運命は個人ではどうすることもできない「生きるも死するも」すべて大きな流れで決まるものだと考えさせられました。

私は十三師団（鏡部隊）山砲兵第十九連隊第六中隊の隊付衛生兵、下士官として長い歲月、中国の第一線で戦ってきました。それは大東亜戦争勃発から終戦までと、ほぼ同期間でありました。

星霜五十有余年過ぎ去った今、私の脳裏を強く刺激

し、漂ってくるのは、この作戦で中隊の約半数に及ぶ百二十四人が異国の地、大陸に散華していったことでもあります。私はその多くの戦友の最期をほとんど看取ってきました。食料、医薬品の補給等はほとんどなく、助かる患者も斃れていったのです。食料が満足にあれば、医薬品の補給があればと、思うことがしばしばありました。

私も多発する傷病者の手当、処置には体力が尽き、体力の限界を感じることもありました。だからといって隊内では許されるはずはありませんでした。私の元気な姿や見回り時の声掛けこそ、隊員にとっては安堵感を持つ唯一のものであったのです。

私の存在の大切さを改めて感銘いたしました。私の任務はただ、患者の手当、処置、看護だけではなかったのです。「人は相手の心を動かす」と言われておりますが、日常元気な姿で隊員と接触することが知らず知らずのうちに隊員の士気の鼓舞、激励につながっていることを心に秘め、自覚した日常活動をなさなければならぬことを痛切に感じました。

当然、どんな苦しいことでも歯を食いしばって頑張りぬかなければなりません。戦闘間、行軍間、傷病者に対する迅速な応急処置、的確な判断、手当、猛暑時多発する日射病、戦争病と言われる下痢患者等、その他の疾病者に対する諸手当、看護の対応等、自分なりに日常野戦において得た体験を充分とはいえないものの、遺憾なく發揮することができましたことを自分ながらに嬉しく感じました。

長い歲月、共に戦い、生死を共にした亡き戦友の遺骨は鄭重に、親しい戦友の胸にしっかりと抱かれて、共に祖国の土を踏み、復員しました。歲月の流れるのは早いもので戦後五十有余年過ぎた今も、当時の諸々の戦況が夢の如く脳裏に漂ってきます。

現代から見れば異常な時代とも思われるでしょうが、あの戦争がなかったなら、と嘆いても事實は事實、過去のことを悔やんだり恨んだりしても今更どうにもならないと思います。あのような戦死、戦傷、戦病者、残虐悲惨な戦争、人類の破滅につながる戦争は二度とあってはならないと肝に銘じ、我々はすべてに

耐え難きを忍んできた今、何事にも属することなく満世の平和と太平を願い、その精根を遺憾なく發揮することこそ、大陸の華と散った諸英霊に洵の捧げでなからうかと心に秘め、その一言に尽きるのであります。

【解説】

第十三師団 山砲第十九連隊

昭和十二年九月二十四日、部隊は、新潟県高田市において編成された。

部隊の行動の概略は次ぎのごとくである。

昭和十二年

九月二十四日 新潟県高田市において編成完結

九月二十六日 高田出発

九月二十七日 神戸港出帆

十月三日 上海及び呉淞に上陸

十月十日 上海付近の戦争に参加

十二月中旬より十二月下旬

江南における追撃戦闘、江陰、南京攻略戦戦闘

並びに江北追撃戦闘に参加

昭和十三年

一月～五月初旬 鶏平地の警備、この間明光河埭
付近の戦闘に参加

五月初旬～七月 徐州会戦に参加並びに虚州附近
の警備

八月～十一月下旬 武漢攻略戦に参加

十二月～昭和十四年三月 黄波附近の警備

昭和十四年

四月～五月 襄東会戦に参加

六月～昭和十五年四月 応城附近の警備 この間
贛湘会戦・襄南会戦・冬
季反攻作戦に参加

昭和十五年

五月～七月 第一次、第二次宜昌作戦に参加

昭和十九年

五月まで 襄西地区の警備 この間

1 長橋溪右岸地区の戦闘 2 宣西突破作戦

3 北方作戦 4 第一次長沙作戦

5 宜昌用辺地区の戦闘 6 常德殲滅作戦

五月～十二月 第一次湘桂作戦・第二次湘桂作戦
に参加

十二月中旬～昭和二十年四月 宜山附近の警備

昭和二十年

五月～八月十四日 湘桂反転作戦参加

八月十五日 折陽附近において停戦

昭和二十一年

五月十二日 湖口出発

六月十三日 上海出帆

六月十七日 仙崎港入港 復員完結

―歴代連隊長―

初代 陸軍砲兵中佐―大佐 横尾 関

昭和十四年十二月十四日

陸軍砲兵中佐―大佐 島田 乙彦

昭和十六年八月一日

陸軍中佐―大佐 林 作二

昭和十八年六月二十三日

陸軍中佐―大佐 石浜 勲

第十三師団部隊略歴

昭和十二年

九月九日 動員下命

九月十八日 編成完結

初代師団長 陸軍中将 萩州 立兵

九月二十一日 仙台出發

九月二十八日 大阪港出帆 十月一日 上海上陸

十月一日～六日 上海北方地区における戦闘準備

十月七日～十一日 劉家行西方地区戦闘 羅店鎮

南北線における防禦戦闘 紅

陰・無錫の線に向かう追撃戦

閩 鎮江附近揚子江渡河 北

方地区の追撃戦

十二月二十一日～昭和十三年一月二十七日

南京攻略

昭和十三年

一月二十八日 淮陽附近戦闘

四月十九日～五月三日 徐州会戦準備 以後、漢

口・襄東会戦 補第二師

団長 陸軍中将 田中静
亮

昭和十五年

四月 第一次宜昌作戦

補第三代師団長 陸軍中将 内山英太郎

昭和十六年

一月 予南作戦 宜西作戦

秋季宜昌周辺作戦 長沙作戦

補第四代師団長 陸軍中将 赤鹿 理

昭和十七年

漸贛作戦

昭和十八年

江北殲滅作戦

江南殲滅作戦

昭和十九年

常德殲滅作戦

湘桂作戦第一期

第三次長沙作戦

衡陽作戦

湘桂作戦第二期

全県作戦 桂林・柳州攻略戦

十一月十一日～十二月四日 独山作戦

宜山附近警備

昭和二十年

一月 補第五代師団長 陸軍中将 吉田 峯太郎

三月二十五日 都安作戦

五月四日 湘桂反転作戦

八月十八日 全軍復員命令

同師団は、支那事変以降、支那派遣軍の中核、作戦師団として終始戦った戦闘師団であり、山砲兵第十九連隊は、同師団の砲兵として、種々の戦闘に参加し、赫々たる武勲を挙げたのである。

加藤侃一氏は、昭和十七年より昭和二十一年まで、厳しい教育、戦闘に参加、負傷され、二二七ページに及ぶ自分史を書き綴った。